志賀直哉全集

第五卷

志賀直哉全集　第五巻
第二回配本（全十四巻・付別巻）

昭和四十八年六月十八日　發行
定價　二千四百圓

著者　志賀直哉
發行者　岩波雄二郎
發行所　東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號
株式會社　岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします

© 志賀直吉 1973

目次

暗夜行路　前篇……一
序詞（主人公の追憶）……三
第一……一七
一……一九　二……二七
三……三七　四……四七
五……六二　六……七五
七……九二　八……一〇三
九……一一一　十……一一七
十一……一三〇　十二……一三七
第二……一四七
一……一四九　二……一五七
三……一六五　四……一七三
五……一八四　六……一九一

七……二〇〇
八……二〇八
九……二二七
十……二三六
十一……二三九
十二……二四八
十三……二五六
十四……二六四

暗夜行路 後篇……二七七

第三……二七九
一……二八一
二……二八七
三……二九八
四……三〇三
五……三〇九
六……三一六
七……三三五
八……三三三
九……三四一
十……三五一
十一……三五九
十二……三六五
十三……三七三
十四……三八三
十五……三九六
十六……四〇四
十七……四一四
十八……四二四
十九……四三八
第四……四四九
一……四五一
二……四五五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

三……四六一
四……四七七
五……四八〇
六……四八六
七……四九二
八……四九九
九……五〇三
十……五一一
十一……五一七
十二……五二五
十三……五三〇
十四……五四〇
十五……五四六
十六……五五三
十七……五六四
十八……五六九
十九……五七五
二十……五八一

〔初　出〕

憐れな男〔前篇　第二　十四〕……五九三
謙作の追憶〔前篇　序詞〕……六〇四
後篇二十〔後篇　第三　十九末尾〕……六一二
續篇六〔削除〔後篇　第四　五と六の間〕〕……六一四
續篇七〔後篇　第四　六〕……六一八
續篇十〔後篇　第四　十〕……六二三

後記……六二七

暗夜行路

前篇

序詞

（主人公の追憶）

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

私が自分に祖父のある事を知つたのは、私の母が産後の病氣で死に、その後二月程經つて、不意に祖父が私の前に現はれて來た、その時であつた。私の六歳の時であつた。

或る夕方、私は一人、門の前で遊んでゐると、見知らぬ老人が其處へ來て立つた。眼の落ち窪んだ、猫背の何となく見すぼらしい老人だつた。私は何といふ事なくそれに反感を持つた。

老人は笑顔を作つて何か私に話しかけようとした。然し私は一種の惡意から、それをはぐらかして下を向いて了つた。釣上つた口元、それを圍んだ深い皺、變に下品な印象を受けた。「早く行け」私は腹でさう思ひながら、尙意固地に下を向いてゐた。

然し老人は中々その場を立去らうとはしなかつた。私は妙に居堪らない氣持になつて來た。私は不意に立上つて門内へ駈け込んだ。其時、

「オイ〳〵お前は謙作かネ」と老人が背後から云つた。

私はその言葉で突きのめされたやうに感じた。そして立止つた。振返つた私は心では用心してゐたが、首はいつか音なしく默頭いて了つた。

「お父さんは在宅かネ？」と老人が訊いた。

私は首を振つた。然し此うは手な物言ひが變に私を壓迫した。

老人は近寄つて來て、私の頭へ手をやり、

「大きくなつた」と云つた。

此老人が何者であるか、私には解らなかつた。然し或る不思議な本能で、それが近い肉親である事を既に感じてゐた。私は息苦しくなつて來た。

老人は其儘歸つて行つた。

二三日すると其老人は又やつて來た。其時私は初めてそれを祖父として父から紹介された。

更に十日程すると、何故か私だけが其祖父の家に引きとられる事になつた。そして私は根岸のお行の松に近い或る横町の奥の小さい古家に引きとられて行つた。

其處には祖父の他にお榮といふ二十三四の女が居た。

私の周圍の空氣は全く今までとは變つて居た。總てが貧乏臭く下品だつた。

他の同胞が皆自家に殘つて居るのに、自分だけが此下品な祖父に引きとられた事は、子供ながらに面白くなかつた。然し不公平には幼兒から慣らされてゐた。今に始まつた事でないだけ、何故かを他人に訊く氣も私には起らなかつた。然しかういふ風にして、こんな事が、これからの生涯にも度々起るだらうと云ふ漠然とした豫感が、私の氣持を淋しくした。それにつけても私は二ヶ月前に死んだ母を憶ひ、悲しい氣

持になつた。

父は私に積極的につらく當る事はなかつたが、常に〳〵冷たかつた。が、この事には私は餘りに慣らされてゐた。それが私にとつて父子關係の經驗としての全體だつた。私は他の同胞の同じ經驗をそれに比較するさへ知らなかつた。それ故、私はその事をさう悲しくは感じなかつた。

母は何方かと云へば私には邪慳だつた。私は事々に叱られた。實際私はきかん坊で我儘でもあつた。が、同じ事が他の同胞では叱られず、私の場合だけでは叱られるやうな事がよくあつた。然し、それにもかかはらず、私は心から母を慕ひ愛してゐた。

四つか五つか忘れた。兎に角、秋の夕方の事だつた。私は人々が夕餉の支度で忙しく働いてゐる隙に、しも手洗場の屋根へ懸け捨ててあつた梯子から誰にも氣づかれずに一人、母屋の屋根へ登つて行つた事がある。棟傳ひに鬼瓦の處まで行つて馬乘りになると、變に快活な氣分になつて、私は大きな聲で唱歌を唄つて居た。私としてはこんな高い處へ登つたのは初めてだつた。普段下からばかり見上げてゐた柿の木が、今は足の下にある。

西の空が美しく夕映えてゐる。烏が忙しく飛んでゐる……

間もなく私は、

「謙作。――謙作」と下で母の呼んでゐるのに氣がついた。それは氣味の惡い程優しい調子だつた。

「あのネ、其處にぢつとして居るのよ。動くのぢや、ありませんよ。今山本が行きますからネ。其處に音なしくして居るのよ」

母の眼は少し釣上つて見えた。甚く優しいだけ只事でない事が知れた。私は山本の來るまでに降りて了はうと思つた。そして馬乘りの儘少し後じさつた。

「ああつ！」母は恐怖から泣きさうな表情をした。「謙作は音なしいこと。お母さんの云ふ事をよくきくのネ」

私はぢつと眼を放さずにゐる、變に鋭い母の視線から縛られたやうになつて、身動きが出來なくなつた。

間もなく書生と車夫との手で私は用心深く下された。

案の定、私は母から烈しく打たれた。母は亢奮から泣き出した。

母に死なれてから此記憶は急に明瞭して來た。後年もこれを憶ふ度、いつも私は涙を誘はれた。何といつても母だけは本統に自分を愛して居てくれた、私はさう思ふ。

前後はわからない。が、其頃に違ひない。

私は一人茶の間で寢ころんで居た。其處に父が歸つて來た。父は默つて、袂から菓子の紙包を出し、茶

簞笥の上に置いて出て行つた。私は寢た儘、じろ〳〵それを見てゐた。

父が又入つて來た。そして、今度は紙包を戸棚の奥へ仕舞ひ込んで、出て行つた。

私はむつとした。氣分が急に暗くなつた。間もなく母が、父の脱ぎ捨てた外出着を持つて、次の間へ入つて來た。私には我儘な氣持が無闇と込み上げて來た。泣きたいやうな、怒りたいやうな氣持だつた。

「母さん、お菓子」

「何を云ふんです」母は言下に叱つた。その少し前に私は其日のおやつを貰つてゐたのだ。

「何か。よう、何か」

母は應じなかつた。そして、疊んだ着物を簞笥へ仕舞つて出て行かうとした。

私は起き上つて、

「よう、何か」かういつて、母の前へ立ちふさがつた。母は默つて私の頰をぐいとつねつた。私は怒つて其手をピシャリと打つた。

「もう食べたぢや、ありませんか。何です」母は私をにらんだ。

私は露骨に父の持つて歸つた菓子をせびり出した。

「いけません。そんな……」

「いや！」私は權利をでも主張するやうに頑固に首を振つた。何しろ、私は氣持がクシャ〳〵してかな

はなかつた。其菓子がそれ程に食ひたいのではない。兎に角、思ひ切り泣くか、怒られるか、打たれるか、何かそんな事でもなければ、どうにも氣持が變へられなくなつて居た。

母は私の手を振り拂つて、出て行かうとした。私は後ろから不意に母の帶へ手をかけ、ぐいと力一杯に引いた。母はよろけて障子に摑まつた。其障子がはづれた。

母は本氣で怒り出した。そして、私の手首を摑み、ぐん／＼戸棚の前へ引張つて行つた。母は片腕で私の頭を抱へて置いて、いやがる私の口へ其厚切りの羊羹を無理に押し込んだ。食ひしばつてゐる味噌齒の間から、羊羹が細い棒になつて入つて來るのを感じながら、私は度膽を拔かれて、泣く事も出來なかつた。

亢奮から、母は急に泣出した。少時して私も烈しく泣出した。

根岸の家では總てが自墮落だつた。祖父は朝起きると楊子をくはへて錢湯へ出かけた。そして歸ると其寢間着姿で朝餉の膳に向つた。

來る客も變つた色々な種類の人間が來た。殊に花合戰をする、その晩には妙な取合せの人々が集まつて來た。大學生、それから古道具屋、それから小說家(?)、それから山上さんと皆が云つてゐる五十餘の一寸未亡人らしい女などであつた。此女は其頃の醫者が持つたやうな小さい黑革の手さげ鞄を持つて來た。それには、きまつて澤山な小錢と、一揃ひの新しい花札と太い金緣の眼鏡とが入つて居たさうである。然

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com